絵の具による歴史の発掘と再構築

杉浦大介
AIRS

すぎうら・だいすけ
青森市在住。ACACのサポーター団体AIRS（エアーズ）のメンバーとして、アーティストの制作補助やイベントにボランティアとして多数参加。野原の滞在制作では、滞在開始四日後のサポーターとの顔合わせ交流会に参加したことを皮切りに、モチーフとなる石拾いへの同行、協働制作への参加、展覧会オープン後の公開制作と作品完成まで見届け、全ての制作工程に立ち会った。

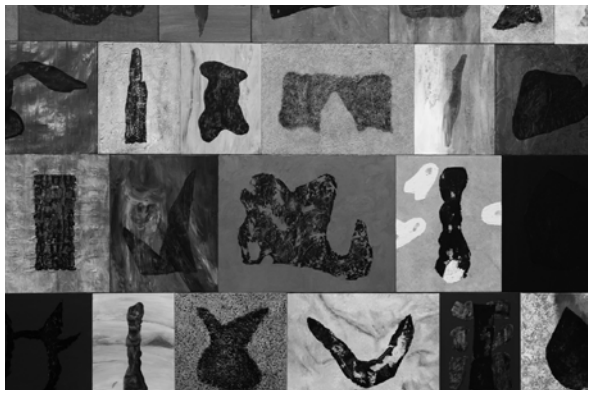
野

原万里絵さんのお話を初めて伺った際、ご自身の見たものから得られた感覚に忠実な方という印象を受けた。協働制作については「最終的に自分の作品として完成させたい」という意志が明確に語られた。

ACACのワークショップでは参加者が「上手でなければならない」と思わず比較的自由に活動させて頂ける雰囲気があるが、今回は協働制作とのことで「教えて頂く」つもりで参加した。創作棟では作家自ら県内各地で採集した石が博物館のように並べられており、壮観だった。描きたい石を選び、石の地肌にどんな色がどういった順序で重なっているか観察する。それに合った下地やメディウムの組合せ、色を重ねる回数と順序を作家と相談して共有する。絵の具を混ぜて目的の色を作り、塗り重ねる以外に、ヘラで削って下地を活かすことも。純粋に指導を受けるのとも、指示通りの作業を忠実にこなすのとも違う感覚。こちらの作業を見て意図を持った方針を示すと同時に、短い時間を長く使って、こちらから意思を持った反応が返ってくるのを待ってくださる。主観と客観、能動と受動を交換し合う、双方の主体性のキャッチボールのように制作は進んだ。「一つの絵を描くのをどこで止めるかはその人の経験が現れる」という作家の言葉が、帰宅後も姿を変えて幾度も心に浮かんだ。

展覧会は協働制作した絵がほぼそのまま並んだ、さながら石図鑑といった様相から始まり、公開制作が進むにつれて絵は奥行きを増していった。絵の中央の物体は「つよさ」と「よわさ」のバランスを吟味して描かれているように見えた。協働制作した下地は、作家自身の「強い要素」に見える物体を泳がせ、互いに斥け合わないように緩やかに結びつける媒質のような働きをしていた。元来、全く異なる人々が描いた絵なのに、時間的な厚みが揃って見える。人の集団に生じる不均衡を相対化し、調和させようとする作家の意志が窺われた。破壊と再構築は、人工物の歴史以外に、自然の景観でも災害等に伴い生じることがある。一部を残し、少しずつ新しいものに組み変わっていく世界観は自然なように思えた。

《黒の立体―計測のドローイングより―》では、光に浮かび上がる一連の彫刻群と、くっきりと二重に映る影の対比が白壁に映える。その隣に続きギャラリー最深部の暗がりに掛けられた線描では、物体の群像が赤い測線を従えて躍動する。原初のイメージとしての線描から始まり、平面から飛び出して影を与えられた立体となり、そして協働制作した下地という海へ浮かべられて再び平面へ姿を変えていく物体たち。予想外の地点へ移ろいゆく目的地を共に追いかけた協働制作の足跡が、作品の厚みとなって表れていた。色を塗り重ね、絵の背後にある層を想像する中で、見えない過去と現在のつながりを発掘し、これらの過程を作家と共有する貴重な機会となった。



右頁
左:《黒の立体―計測のドローイングより―》2020年
アクリル絵の具、メディウム、スタイロフォーム、紙粘土、サイズ可変
右:《石の肖像―埋没する形象02―》2020年
アクリル絵の具、メディウム、ジェッソ、キャンバス、パネル
9,272mm×2,775mm×25mm

《石の肖像―埋没する形象02―》2020年
アクリル絵の具、メディウム、ジェッソ、キャンバス、パネル
9,272mm×2,775mm×25mm

制作スタジオの様子。上部は青森県内で拾い集めた石。

右から:
《Drawing―計測03―》2020年、紙にインク、色鉛筆、額装、270×332×32mm
《Drawing―計測06―》2020年、紙にインク、色鉛筆、額装、332×270×32mm
《Drawing―計測07―》2020年、紙にインク、色鉛筆、額装、332×270×32mm

Photo／小山田邦哉